実践報告

保育者養成課程における表現活動の指導方法に関する研究

――ICT を活用した授業実践を中心として――

A study on teaching method of expressive activities in the Nursery School teacher course
――Focusing on teaching practice with ICT――

曲　田　映　世

キーワード　表現活動、ICT、指導方法

1. はじめに

保育現場では子どもたちに豊かな感性や表現する力を育てる一環として、表現活動が取り入れられている。それらは乳幼児の心身の発育・発達を促進させるための保育者の様々な働きかけや関わりが、重要な役割を果たすと言えるであろう。『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の改訂に伴う新たな幼児教育課程では、具体的な姿を 10 項目に整理した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」を一体的に育むような、遊びを中心とした教育が求められている。保育者が 5 領域に示される教育内容を指導するために、これらの力を養成校で養う必要があり、表現活動もそのひとつである。しかし、表現活動というと学生はピアノの技術的な側面での苦手意識を持つことが多く、保育所や幼稚園での実習においてもピアノに関する不安を抱える学生は多い。だが、表現活動を行うには技術的な側面だけでなく、「表現する力を育てる」ことが大切である。そのためには、「子どもの表現する力を育てるためにどのようなことが必要か」ということも視野に入れた養成教育を行う必要がある。

以上のことから、保育者養成課程における表現活動の学習では、子どもの心身の発達や取り巻く環境等を理解し、子どもの生活や遊びが充実するよう援助する力を習得できるようなカリキュラムが必要であると考えられる。そのためにもわずかな時間で保育者としての表現力を向上するために、ICT を活用することが有効であると考える。

2. 研究の目的

本研究では、表現活動の授業で保育者として

の表現力を身につけるための方法として、手遊びを短時間で実践することとした。その際にはICT も活用する。

手遊びは、道具を用いずにどこでも気楽に楽しむことができ、保育現場で用いられることが多い。手遊びは、子どもにとって保育者や友だちとコミュニケーションの手段でもあり、音楽の基礎的な能力の習得にもつながる。また、自分自身の身体の部位に気がつく機会にもなる。このようなことから、保育内容を充実させるためにも保育者は手遊びのレパートリーを多く持つことや、アレンジを加えるなど遊びとしての柔軟な対応が求められている。

また、本研究ではタブレット端末（Apple 社製 iPad mini、以下タブレットとする）を使用している。タブレットを使用する利点については、タブレットの中にあるアプリケーションソフトをピアノの代用として使用できることや、実践を録画し、その場ですぐに再生ができること、さらに、録画を見ながら自分の顔の表情や振り、歌などについて確認できることがある。

また、手遊びの実践方法を具体的に考え、その実践をふり返るために自己の評価を行うことのできるワークシート（資料 1）を作成した。

3. 方　　法

この授業実践は、S 大学における 2016（平成 28）年度の後期開講科目「子どもの表現Ⅱ（指導法）」（受講者 42 名、90 分×15 回実施）内の取り組みである。15 回の授業内容については表 1 に示すとおりである。このうち、7、8 回目に実施した「うたうことを中心とした表現活動」において、タブレットを活用した授業を実施した。この授業実践までに、「表現」とは何か、音楽的発達や乳幼児の音楽的な表現への気づきについての教授を行っている。6 回目の授業ではうたうことの基礎的な指導を行い、発声などの基礎技能の習得に努めた。このような実践を行った上で 7、8 回目の授業を実践した。

表 1　授業計画

回数	内容
1	オリエンテーション／領域「表現」のねらいおよび内容
2	乳幼児期における音楽的発達特性
3	生活や遊びの中での音楽表現①
4	生活や遊びの中での音楽表現②
5	生活や遊びの中での音楽表現③
6	うたうことを中心とした表現活動①
7	うたうことを中心とした表現活動②
8	うたうことを中心とした表現活動③
9	身体を動かすことを中心とした表現活動①
10	身体を動かすことを中心とした表現活動②
11	楽器遊びを中心とした表現活動①
12	楽器遊びを中心とした表現活動②
13	模擬保育①
14	模擬保育②
15	まとめ

(1) 実施方法

4～5 名の 10 グループに分け、各班に 1 台タブレットを配布し、①～⑦までをグループ毎に進め、⑧・⑨は全体で行った。

①指定された 6 つの手遊び・うた遊び（おにのパンツ・カレーライスのうた・くいしんぼうのゴリラ・しあわせなら手をたたこう・はちべいさんとじゅうべいさん・やおやのおみせ）の楽譜から、1 つを選取し、手の振りや歌詞、音程を覚える。音程については、タブレットに入っているアプリケーションソフト（GarageBand : Apple 社が開発・販売する mac OS/iOS 用の初心者

向けの音楽制作ソフトウェア）のピアノ機能を使用して練習する。

②選取した手遊び・うた遊びをワークシートに基づき、実践する際のポイント（楽しさのポイント、実践時の留意点・工夫点、遊び方、アレンジ）を考える。

③グループ内で保育者役、子ども役、撮影者に分かれ、保育者役をダブレットで撮影し、実践を行う。実践の様子を図1に示す。

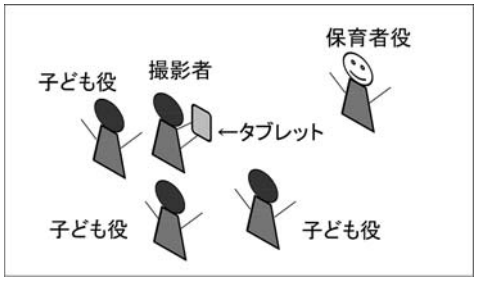

図1　実践の様子

④グループ全員の実践が終えたところで映像を見て、ワークシートを参考に実践をふり返る。

⑤子ども役の学生にアドバイスをもらう。

⑥1回目の実践から、映像やアドバイスを参考に改善点や課題を抽出し、練習する。

⑦③～⑤をくり返し、2回目の実践をふり返る。

⑧受講者全員の前で実践を行う。発表については、グループでも1人でも良いとした。

⑨全体的なふりかえりを行う。

(2) 評価項目と評価方法

自己での評価については、上記の④でのワークシートを活用した。項目は、保育者として必要な表現力を6項目設定した。内容は以下のとおりである。

①メロディー、歌詞、振りをしっかり覚えていた。

②自信を持ってできた。

③にこやかであった。

④子どもにわかりやすく伝わるよう、言葉ははっきりしていた。

⑤振りは大きめであった。

⑥子どもの反応に合わせて行えていた。

各評価項目の評価は、1点から5点の5段階評価で得点化したものを評価点としている。評価点は1点がもっとも低い評価であり、5点がもっとも高い評価である。

学生自身による自己での評価の評価点（以下、「自己評価」とする）を1回目と2回目の評価の評価点を分析対象とし、実践の上達度の検討をおこなった。当該の授業出席者は39名であり、そのうち回答に不備がなかった34名のデータを検討した。

(3) 倫理的配慮

授業時に課題やワークシートの意義を説明した。さらに、自己評価結果については成績評価等に不利益を生じるものではないことを説明した。また、本研究において、効果を検討するためにデータを取り扱う際には、個人情報と内容とを分け、自由記述についてはキーワード化し、個人が特定されないようにした。

4. 結果と考察

手遊びの表現力が向上したかどうかを検討するため、1回目と2回目の自己評価を比較することとした。比較する方法として、平均値を取ることとした。

(1) 1回目の自己評価について

もっとも平均値が高い項目は「③にこやかで

あった。」であった。2 番目は「①メロディー、歌詞、振りをしっかり覚えていた。」であった。3 番目は「⑤振りは大きめであった。」であった。一方もっとも平均値が低かった項目は「⑥子どもの反応に合わせて行えていた。」であった。

表情については意識をして実践できたが、人の前で行うことの緊張などから振りや歌詞などを間違えないことに意識が行き、子どもを見る余裕はなかったと推測される。これは子ども役の学生からのアドバイスにおいても、「恥ずかしがらずに歌う」や「子どもとすることを想定してゆっくりする」などの記述からもわかる。全体の平均値は 3.00 であった。

(2) 2 回目の自己評価について

もっとも平均値が高い項目は 1 回目の自己評価と同様に「③にこやかであった。」であった。2 番目は「⑤振りは大きめであった。」であった。3 番目は「①メロディー、歌詞、振りをしっかり覚えていた。」であった。一方もっとも平均値が低かった項目はこちらも 1 回目の自己評価と同様に「⑥子どもの反応に合わせて行えていた。」であった。

子ども役の学生からのアドバイスからは、「最後の部分を子どもと一緒にすることを伝えておく」などとアレンジに関する記述が多かった。全体の平均値は 4.04 であった。

(3) 1 回目と 2 回目の自己評価の比較について

1 回目と 2 回目の自己評価を比較した結果、いずれの項目についても平均値は高くなっていた。もっとも平均値の上昇が大きかった項目は、「⑥子どもの反応に合わせて行えていた。」であった。これは子ども役の学生からのアドバイスにおいても、「ゆっくりのテンポで子どもに合わせてできていた」「目が合っていた」などが挙がっており、1 回目よりも子どもを意識して実践できたことがわかる。2 番目は「⑤振りは大きめであった。」であった。これはタブレットの動画をその場ですぐに自分の動作を客観的に見たためだと考えられる。3 番目は「②自信を持ってできた。」である。これは改善すべきポイントが明確にわかり、練習ができたためであると考えられる。

平均点の比較を表 2 に示す。

表 2　評価項目別の 1 回目と 2 回目の自己評価の平均点（n＝34）

項目	1 回目	2 回目	平均値の差
1	3.24	4.12	0.88
2	2.88	4.03	1.15
3	3.56	4.50	0.94
4	2.85	3.76	0.91
5	3.00	4.19	1.19
6	2.44	3.65	1.21
全体の平均値	3.00	4.04	1.05

(4) 考察

以上の結果と実践のふり返りから以下のようなことがわかった。

- 声の大きさや身振りなど、細かい部分までより具体的な課題が挙げられた。
- 一人で実践を行うだけでなく、複数人で実践を行うアレンジもあった。
- 他のグループの発表から刺激をうけ、自らもより良い実践を行いたいと思う感想がいくつもあった。

このような学びから、タブレットを活用することによって即時に動画を見ることによって、客観的にふり返り、具体的な課題が明確となり、アレンジにも発展性が見られた。また、グループで実践を行うことにより、より主体的・

協働的に学ぶことにつながり、表現することへの意欲につながった。

しかし、1 回目と 2 回目の自己評価を個別で見てみると 2 回目の自己評価が下がっている学生もいた。下がっている学生の中ではもっと人数が多かった学生は「①メロディー、歌詞、振りをしっかり覚えていた。」であった。これは、複数人での実践をした際にアレンジを加え、新しい振りなどが加わったためと考えられる。また、「本人の振り返りからは、音程を高く始めてしまい、高音の声が出しづらかった」や「もっと練習したかった」などの記述もあった。どちらについても 2 回目の実践をより良く表現するために改善を加えた結果と推測される。そのため、前向きな内容であると考えられる。

以上のように、ICT を取り入れることによって客観的な姿を確認でき、アクティブラーニングを取り入れることによって他者の反応を見ることができ、さらには評価を聞くことができるため、短時間でも改善点などが明確になり、より効果が出たと考えられる。

5. おわりに

本研究では、わずかな時間で ICT を活用することにより、保育者としての表現力を向上することができるのかについて、教育効果を高める指導方法の実践について検討を行った。

学生の自己評価によって、短時間であっても具体的な改善点を見いだすことができたことがわかった。さらに、子どもの反応を見ながら、実践を行うことは技術面だけでなく、子どもの生活や遊びが充実するよう援助する力の習得が育っていることにつながると考えられる。そのため、わずかな時間であっても ICT を活用することによって、様々な効果があったことがわかった。今後もより改善を加え、多様な試みを実践していきたい。

参考文献

・無藤隆、汐見稔幸、砂上史子著「『ここがポイント！　3 法令ガイドブック』新しい『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の理解のために」フレーベル館、2017
・無藤隆代表、保育教諭養成課程研究会編著「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか－モデルカリキュラムに基づいた提案－」萌文書林、2017
・小山茂喜、荒井和之「タブレット PC を活用した歌唱における表現追求の試み」信州大学教職センター教育実践研究Ⅰ、pp 44-55、2017
・仲嶺まり子、高濱正文、秋元文緒「保育者養成における表現活動を通した領域意識向上の試み」別府大学短期大学部紀要 36、pp.1-10、2017
・岡本拡子、今井邦枝「総合的表現活動における学生の学び」高崎健康福祉大学紀要 16、pp.61-73、2017
・松前義昌・濱本恵康・三村真弓「－タブレット端末を利用したパート練習の試み－」中学教育：研究紀要、pp 41-48、2016
・川村高弘「保育者の意欲向上や苦手意識の克服に影響を及ぼす要因について」神戸女子短期大学紀要 61、pp.11-17、2016
・中西利恵、大森雅人、曲田映世、高岡昌子、山口美智子「実習指導の効果を高める教育方法の研究（その 3）－幼稚園・保育所での実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から－」相愛大学研究論集第 28 号、pp 167-180、2012
・中西利恵、大森雅人、曲田映世、高濱麻貴「実習指導の効果を高める教育方法の研究（その 2）－学生の自己評価と現場評価のズレを活用した事前・事後指導のあり方－」相愛大学人間発達学研究第 2 号、pp 47-54、2011
・中西利恵、大森雅人、益田圭、曲田映世、高濱麻貴「実習指導の効果を高める教育方法の研究－保育所実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から－」相愛大学人間発達学研究創刊号、pp 31-38、2010

資料1　ワークシート

題名	
楽しさのポイント	遊び方
実践するときの留意点・工夫点	
アレンジ	

１回目の自己評価	
①メロディー、歌詞、振りをしっかり覚えていた。	５・４・３・２・１
②自信を持ってできた。	５・４・３・２・１
③にこやかであった。	５・４・３・２・１
④子どもにわかりやすく伝わるよう、言葉ははっきりしていた。	５・４・３・２・１
⑤振りは大きめであった。	５・４・３・２・１
⑥子どもの反応に合わせて行えていた。	５・４・３・２・１

友だちからのアドバイスなど

２回目の自己評価	
①メロディー、歌詞、振りをしっかり覚えていた。	５・４・３・２・１
②自信を持ってできた。	５・４・３・２・１
③にこやかであった。	５・４・３・２・１
④子どもにわかりやすく伝わるよう、言葉ははっきりしていた。	５・４・３・２・１
⑤振りは大きめであった。	５・４・３・２・１
⑥子どもの反応に合わせて行えていた。	５・４・３・２・１

友だちからのアドバイスなど